

戦後日本における前期中等教育の初期段階秩序

——沖縄県金武中学校の場合——

富山大学 仲 嶺 政 光

1. 6・3・3制下における新制中学の性格

本稿は、日本の戦後6・3・3制学校体系のもとで発足した新制中学の秩序がいかに形づくられたのか、ということについての事例研究である。新制中学は、(1)日本においてはじめて中等教育の義務化が実現された学校であり、(2)終戦直後の窮乏状況のもと手探りのなかで発足し、当初は高い長欠率をかかえながらも1960年代までには一般に定着し、(3)その後新制高校への進学率が高水準に達していく中で多くの者にとって中間経由的な学校としての性格を備えるようになり、現在に至る。他方、1970年代半ばに90%を超える者たちが通うようになり全入に近づいた新制高校もまた少し遅れて同じ道をたどり——今日では専門学校や大学に進む者も多く、その比率は18歳人口の八割程度に及ぶ——、日本の中等教育は、戦後史を通じて前期・後期ともに中間経由的な性格を帯びるようになった。中間経由的な学校とは、学校生活を通じて建前では生徒に平等・共同を強調しながら、諸能力の競い合いと序列化を組織する深い矛盾と対立に満ちた過程(久富1996:14)を本格化させるとともに、卒業後の進学に堅実な実績が求められ、なおかつ社会との接続を上級学校に委ねるという自己完結性の弱い準備段階におかれたことを意味している。このような段階では、職業に連なるような学びの目的や意味がつかみづらく、抽象的性格がぬぐえないものとなる。しかしその大衆的な規模での広がりや高度成長以前にはみられなかったものである。久富善之の戦後時期区分論によれば、終戦～1959年は「抑制された競争」の時代にあたる(1993:22-23)。この時期、高校進学率は40～50%、大学進学率は10%程度で、多くの人びとにとって学力競争は身近なものではなく、後期中等・高等教育は「当たり前」ではなかった。従って初期の新制中学の秩序形成は、まじめな学

業・操行成績と進学行動が生徒のよりよい将来を約束するはずである、という期待意識をあてにすることはできなかった。このように新制中学と地域社会の論理とが相互に「食い違ったり妥協したりする中で、新たな力学が生じた可能性」(小林2015:433)のもと、初期的試行錯誤の余地が生み出されることになる。では、当時の教師・生徒たちはどのような秩序のもとに学校的日常を生きていたのだろうか。

菅井鳳展(2005:325-354)は、戦後初期京都の新制中学を対象に、制度的未整備や物質的欠乏のなか、教師・生徒・地域からの財政的支援や「汗の奉仕」などの尽力がなされ、発足時の諸困難を乗り越えていった様子を明らかにしている。そうした協力関係のもとで展開された「学校づくり」が、「陰湿ないじめや校内暴力などといった罪過を抑制」していたのではないかと菅井が指摘している点はきわめて重要である。一つの学校が秩序を獲得することは実は重い課題であり、自明に成り立つものではないからである。早坂淳は、N. ルーマンに依拠し、学校秩序の形成・維持という課題がいかに達成できるのか、ということの理論的検討をおこなっている。それによれば、学校秩序は、教師・生徒、および生徒間関係において常に予期せぬ反応の可能性が無限にありえることから、耐えがたい複雑性に満ちており、紊乱の危機と隣り合わせにある。ところが、教師・生徒のコミュニケーションの経験的蓄積などにより期待通りの反応がなされるはずだ、という信頼が生み出されることによってその複雑性は大きく縮減され、秩序ある関係性が確保されることになる(早坂2006:190)。そのような信頼関係と秩序のあり方は時代とともに多様な形をとるものとなるであろう。本稿の後段では、秩序を分析していくにあたり、B. バーンステインの提唱した理念型である収集コード型／統合コード型という2つの学校タ

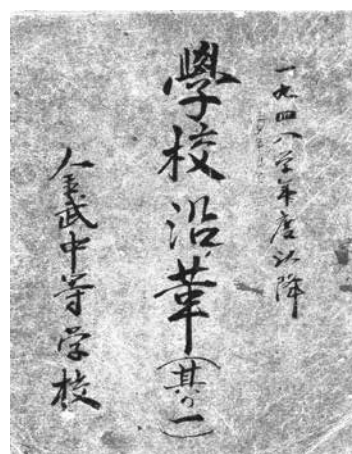
イブを念頭におきながら分析を進めることにする(バーンSTEIN訳書1996=2011:48)。

新制中学は秩序の形成・維持のあり方を考える上で興味深い学校段階である。というのも新制中学は、第一に、高校進学か就職か、あるいは後にはどの高校に進学するのか、という形で卒業生の進路が分岐する端緒となる。そうした人生の岐路としての新制中学は無選抜に地域社会に存在する多様な若者たちを一つの学校の生徒として三年間ものあいだ抱え込むとともに、卒業時に厳然たる人材配分の働きを発揮する最初の学校である。第二に、そうした多様な生徒を擁する新制中学は、学力問題、怠学、教師への反抗、暴力、非行、長欠・不登校、いじめを含む人間関係問題など教育的諸困難の多発地帯として知られる。このことは、言い換えれば、新制中学は秩序の形成・維持という課題が顕在化しやすいという特徴が見出される。第三に、秩序形成・維持の課題が他の学校段階に比べこのように相対的に重いということは、新制中学はその学校なりに望ましい校風や生徒らしさ(久富1996:15-21)というものを築き上げることが容易ではなく、そこにきわめて多大なエネルギーが注がれる場であることをも意味している。

これらの特徴をふまえ、本稿では、沖縄県金武中学校(以下金武中)に残され、創立直前の1948年3月19日から現在もお執筆が続けられ「永年保存」扱いとされている『学校沿革』(金武中蔵、三分冊、1956年度以後は『学校沿革誌』と改称、以下この資料からの引用は年月日で示し、読みやすさを考慮し一部に句読点を加えた)その他を主な素材として、金武中の秩序形成・維持課題の解決がどのようなものだったのかを分析していく。特に本稿が注目するのは、高度成長以前における初期的秩序がどのように成り立っていたのか(本稿ではこの時期を初期段階と表現する)を探ることであり、教師や生徒の具体的な動きを掘り起こしていく。

2. 本稿で扱う資料について

『学校沿革』は、校長が執筆を担当した学校の日々の記録である。それはもちろん学校の日常的すべてが記録された文書ではないし、管理職の立



場から記述されたものであることから、教室での細かな出来事は記されていない。また、時期によって記述内容・記述量も変化しているのでそのトータルな書誌的分析も一つの研究課題だが(例えば仲嶺2018)、詳細については他日を期すことにし、ここでは、『学校沿革』がどのように記述されているのか、という観点から概略を述べたい。

『学校沿革』の執筆は、当初は白紙と毛筆が用いられた。その記述は、日付で記事内容が区別され、その日の出来事を日記風に記すスタイルをとっていた。1957年度に初代校長が異動となったのを境にペンをを用いて記されるようになったが、日記風の叙述スタイルはしばらく維持された。その後1960年代に入ると、諸行事・出来事の簡条書きという新しいスタイルがみられるようになる。例えば学校儀式の記述をみると、「入学式を行う。新入生八九名、某小学校長、某小学校長外職員、父兄多数出席のもとに盛大な式を行う。新一年生の学級編成をなす。式終了後、不適応生徒の指導について全校職員と話し合った」(1958.4.3)のような詳しい描写を含む日記風のスタイルはとられなくなり、「始業式」(1960.4.2)などと諸行事執行の事実のみを記す形に変化した。また、1965年度からは罫紙が用いられ、日々の記録とそれ以外の別紙挿入という書記文化的な規格化が進んでいく。

ここで、1年を365日(閏年は366日)として1日あたりの平均執筆文字数の変化という形式的な側面についてみると(図表1)、『学校沿革』は、①1950年度でやや執筆量が多いが、その後②1960

年度・③1970年度でそれがいったん下がり、④1980年度で大きく増加する¹⁾。続いて年度ごとの執筆量のバラツキを標準偏差÷平均＝変動係数で確認すると、比較的豊富な記述量のある1950年度と1980年度で安定した執筆ペースであったことがうかがえる。1950年度は創立初期に特有の学校での出来事の多さを、1980年度は生徒の諸活動などに関する記述が増加し秩序形成に力が注がれている事情を、それぞれ類推させる結果となっている。

図表 1 平均文字数と標準偏差と変動係数

	①1950	②1960	③1970	④1980
平均文字数	5.54	1.18	3.75	9.00
標準偏差	14.37	4.80	16.20	24.15
変動係数	2.60	4.07	4.32	2.68

『学校沿革』からは学校でおこなわれた主な出来事をうかがうことができるが、それらが教師や生徒にどのように運用されたのか、という具体性を欠く側面がある。そこで本稿では、『学校沿革』とは別の2つのデータを検討材料に加えて解釈の補強を試みたい。それは、『創立五十周年記念誌』（金武中学校1999）と初代校長の回想録（松岡他1994）である。これらは、教師や生徒らが学校生活を思い起こしてみても印象深かった事柄を拾い上げ、限られたスペースの中で記述・口述した文章である。そのため、断片的で忘却や省略の多い記録であることは否めないが、『学校沿革』に記されることのない学校生活の具体像を把握するための貴重な材料として用いたい。

3. 「零からの出発」（松岡他1994：144）

まず『創立五十周年記念誌』で関係者によって語られたことにもとづき、金武中での出発についてみてみよう。沖縄戦で壊滅的な打撃を被ったこともあり、金武中での出発はきわめて多難なものであった。校地の整備、校舎の確保、その他教育に必要な諸々の資材が絶対的に欠如する中で学校づくりの開始である。1949～50年度『学校沿革』の末尾に記された「本学年年度の努力点」の筆頭に「校風の樹立」、続いて「教育環境の樹立」があげられている点は当時の困難の大きさを象徴している。

以後「校長の開拓精神、全職員の創意工夫、生徒たちの不屈の金武魂により学校は生生発展」（松岡他1994：137）していく。

初期段階金武中においては教師、生徒、地域が力を結集した。ある生徒の記憶によれば、「いろんな施設設備のことで毎日何かこさえていた」（p.189）。時には「危険な作業」（松岡他1994：183）も含まれた。「机、腰掛けがないから先生がたは校長先生と一緒に作るんですね」（p.195）。開校当初は「中学の職員室は金武小学校と同居」（p.187）だった。教室は金武小学校の一角を借用し、1950年に現在の幼稚園の敷地に移転、さらに1961年には現在の敷地に移転して落ち着く。「チョークがない、雑巾がない、教科書がない、そういう状況ですから、自分たちで作ったガリ版の教科書でやりました」（p.184）。その手作りの教科書は「紙の質が非常に悪い」（p.192）ものだった。その後日本の教科書が金武中に届いたのは1948年11月24日のことであり、教師たちはただちに「新教科書取扱の講習会」（1948.12.8）に参加している。チョーク、ノート、鉛筆などの教具・学用品は海外移民の金武村人会からの尽力によって潤った。『学校沿革』では、「布哇村人同胞より学用品小包十五箇到着、ハワイよりの学校救援活動始まる」（1948.5.21）を皮切りに、幾度もそれらを寄贈されたことが記されている。

金武中は、このような努力と協力関係の積み重ねにより、少しずつ学校らしい姿を整えていく。1948年6月8日には「KIN」の文字があらわれた最初の校章が制定され（1958年頃に現在のものに改定）、「家庭科担任の某先生の指導の下に女生徒の制服が考案され……男子生徒は校章に二本テープの制帽が出来上がり、生徒は一段と自重心と中学生の誇りに燃えて来た」（松岡他1994：166）。さらに創立十周年の際には校歌、校歌ダンスなども創作された（p.199、それ以前は小学校の校歌が歌われた：p.201）。新制金武中は文字通りすべてが新しい学校づくりに向けての試行錯誤の連続だった。

4. 競争の教育・前夜の人間形成環境

このように学校づくりにむけての尽力がなされ

る一方、義務制とはいえ金武中の初期段階は、延長された就学期間の意義がまだ不透明なものだった。「懇談会を催しても、人々は思う様に集まらず、〔校長〕先生は苦悩しておられた様でした」（松岡他1994：141）。初期段階は学力競争という学校的価値観が地域の幅広い層に浸透しておらず、そればかりか「児童労働の必要やムラ社会の文化と学校の文化とが相容れない」側面から、高い長欠率をかかえた中学校も存在したとされる（木村2015：8-11）。金武中『学校沿革』末尾に掲載された統計データをみると、1948年度開校当初の「出席百分比」は95.36%と高率であったが、1959年度までは旧自然村ごとの「各区分出席情報」が算出され、その出席率の高さで各区に順位がつけられるなど村落共同体的な秩序を利用した出席競争を組織する動きもみられた。

金武中学校関係者の話によれば、地域の農業従事者の人びとの中に生徒が入り混じり、そしてなんと職員たちもともに労働にいそしんだ様子がかえり、遊びというのはないですね。生きていけないといけないうし、朝から晩まで仕事だけです。労働だけ」「某さんの田んぼだったですね、職員、全校生徒いっせいにいって、田植えをした経験があるんですが、楽しみのひとこまでしたね」（金武中学校1999：204）「自然の中で大勢で賑やかに汗を流す姿は、活力に満ちているようにさえ思いました」（松岡他1994：189）。

このような結いの伝統的色彩を帯びた地域－学校間の混交状態も一部みられるなか、一つの教育機関としての意義を見出すために金武中が地域と歩調をあわせる動きがあったことが『学校沿革』からうかがえる。1954年度における「教育実践の努力点」の見出しのもと、その筆頭に掲げられたのは「一、職業教育の振興」であり、「職業教育の理念／職業教育の実際／職業教育の学習過程／職業家庭科カリキュラム構成／職業教育施設」などの文字がならぶ。その末尾は「八、受験準備教育の廃止」（1954.4.7）という驚くべき劇的な宣言で締めくくられている。

このことは、初期段階金武中が自己完結的で自由度の高い教育機関でありえたこと、そして学校で学ぶことの意味が抽象化することに対する歯止めが幅広い層に希求されていたことをそれぞれ示

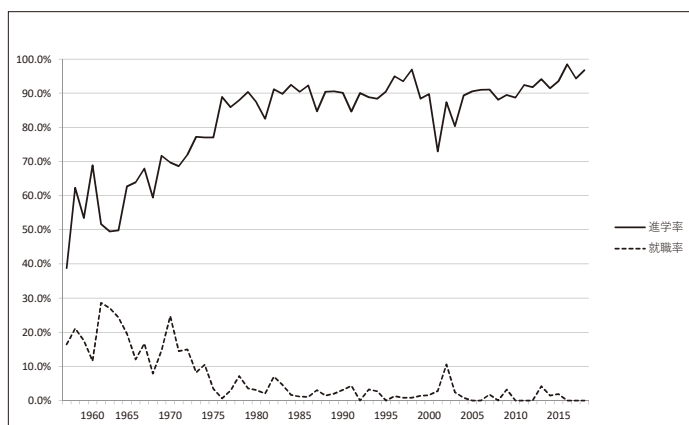
しているものと思われる。初期段階は「人びとによって生きられたこの学校史と、学校側によって意図されてきたそれとのずれ」が大きいものであるが、しかしそれは反面で教育の世界に「奇妙な「自由」」（中内1992：53-54）をもたらす。すなわち金武中における「抑制された競争」期とは、多くの人びとにとって知識詰め込み型の中等教育が支持されておらず、それとは別の実学重視の人間形成が望ましいものとされていた意識を当の学校側自身が自覚的で、これを重く受けとめていた時代ともいえる。実際、職業・家庭科²⁾という教科の枠を大幅に超えて、生徒たちは作業に明け暮れた。「ディーゼル機関、その他諸先輩から数多くの機器が寄せられました。それにより、職員と生徒の合作で校内製材所ができ、技術の実技指導」が展開された。先に述べた机・腰掛け製作作業にあたり「威力を発揮したのが、簡易製材機であった……当時の学校に製材機があったのは、本校だけだったと思う。作業は学習の一環として進められ、生徒たちも自分の机、腰掛けを作るという興味と関心をもち意欲的に取り組んでいた」（松岡他1994：142,145）。もちろん農作業も盛んだった。「鋤、鎌持参の勤労も結構あって、堆肥を作ったり植樹をしたり〔1952年度卒〕」「机に向っての学習よりも、青空教室での勤労学習が主でした。クロトン・モクマオウ等の植樹、薪だし、山入り作業、四Hクラブの乳山羊の飼育など、生産教育に力を入れていました〔1953年度卒〕」「学業面よりも共同作業の思い出が多いです。例えば、学校での野菜作り、一日がかりの某所茶園の草刈り作業、山での植林等です〔1956年度卒〕」「その頃は年中作業ですよ。午前中だけ勉強をして午後は作業だったと思います。それから農業というのもありましたね。ちゃんと、豆を植える時期、イモを植える時期等、教えましたよ〔元教職員〕」（金武中学校1999：82,84,90,185）とある。競争の抑制は、金武中の意義を単に拒絶する反学校の方向ではなく、地域社会に生きる若者たちに同時代の主要産業と有機的に関連づけられた青年期を提供すべきである、という価値観が地域－学校間で共有された方向性をもって成り立っていたということができよう。

このように競争の強固な抑制が地域－学校の両面で効いていたとはいえ、卒業生の40%弱程度が

高校に進学するという萌芽の高学歴傾向がすでに初期段階において認められる。高校進学者の存在は金武中の存在意義を具現する重要な要素の一つであり、教師たちによる学習指導の確かな成果であると認識されていたことは疑いない。しかし『学校沿革』をみると、しばしば生徒の氏名と進学先に加えて家々の名である屋号も丁寧^{ヤースナー}に記載されていたことは注目に値する。屋号とは、親族共同体の本家・分家関係、家業、住居の特徴や地理的位置などを識別する情報が含まれるきわめてローカルな性格を帯びた記号である。その記述には、高校進学を果たした一人ひとりの生徒の出自を明確にして讀えるべきであるという判断が含まれていた。高校進学者は個人的成功者としてだけではなく、家々の誇りとしても意味づけられていたのであった。もっとも、進学希望者の受験指導は課外的な位置づけがなされていて、夜間、「コーラ瓶でしたかね。それに石油を入れてこの芯をもやす……その中で勉強したんですね」（金武中学校1999：201）というように正規の教育時空間と分離された形でなされていた。

これに対し高度成長以後の変化は急激だった。岸政彦は、「日本と同じように沖縄社会も急激な離農と近代化の途上にあり、それは就業形態や世帯構造をも大きく変動させるものだった」と述べている（2013：91）。金武における産業構造の変化をたどってみよう。戦前期金武は「純農村地域でサトウキビ、稲作等の農業が主要産業であった」、そして戦後もしばらくは「農業主体の就業構造」であった。ところが高度成長をむかえ、その構造は大きく変化した。第一次産業従事者の比

率は82.8%（1950）→46.0%（1960）→18.6%（1970）→18.1%（1980）と離農が進み、かわりに1965～70年代にかけて米軍³⁾の「基地機能が拡大」した影響を受けて第三次産業の肥大化が進む（金武町企画開発課1991：3-7；琉球政府行政主席統計局1952=1998：p.013金武村-11-）。『学校沿革』では、1960年代からは進学生徒一人ひとりの氏名も屋号も割愛され数値のみの記述方法へと変化した。「次年度の努力点」における「四、職業教育の拡充」（1960.3.28ほか）はもう第一位から転落している。1956年度卒業生の回想によれば製材機・製粉機は既に「使用不能の状態」（金武中学校1999：91）になっていた。『学校沿革』の記述では1973年度以後「職業」という教科担当者が不在となり、少なくとも1970年代には学校での独自の生産教育は既に消長し、地域密着型の知識技術伝達は学校的な技術・家庭科に転身を遂げていたと思われる。次のような回想は示唆的である。「学校から家に帰って家の手伝いや畑につれて行かれたりはしたけれども、それ以外はとにかく「自由の身」だった〔1972年度卒〕」（金武中学校1999：126）。高度成長を背景とした進学熱の高まりは青年期の延長を促し、地域・特定家業に限定されない労働市場の広まりの中で地域－学校間の強固で閉域的具体性をもった価値共有関係は打ち負かされ、以後「職業教育の拡充」課題は上級の学校へと委ねられることとなっていく⁴⁾。図表2『学校基本調査報告書』沖縄県版に掲載された金武中卒業者の進路をみると、「高校進学率」の割合が1960～70年代にかけて上昇し、90%程度に達して中間経由的な性格を備えるに至り、新たな秩序形成課題へと移行



図表2 金武中卒業者の進路（1957～2018）

している様子がうかがえる。

5. 初期段階における人間形成の二重構造

振り返って、初期段階金武中における地域産業への接近がどのような構図のもとになされていたのかを考えたい。仮に初期段階の金武中が勉学のみ、地域産業との連関が不透明な活動に終始していたなら、いきいきとした学校生活は実現できなかったであろう。初期段階金武中ではふんだんな学校施設設備のこしらえや農作業が組み込まれる中で労働を尊重する態度が鼓舞された。初代校長は教師たちに次のような言葉を伝えたという。「働け!! 働くことそれ自体が人生である」(松岡他1994:166)。金武の戦前期近代学校は60年以上の歴史を持つため、教室に教材や机、腰掛けなどの備えがあることは至極当然の状況と受けとめられていたと類推される。従って、それらの欠如は大きな問題意識を教師・生徒・地域に生み出し、ともどもに学校づくりに取り組む際の原動力となったように思える。また、勤労を何よりも美德とする地域の精神的な構えもその支えとなったであろう。「三番百姓の第一や節々毛作うくりな油断さんぐと働ちゅし〔季節の農作を、遅れず、油断せず、働きなさい〕」(金武町誌編纂委員会1983:605、十番口説の一節より)。

初期段階金武中では、「米軍チリ捨場〔非行の温床ともいわれていた場所である〕にたむろしていた生徒の影」「戦後の混乱期で社会も不健全であった。生徒たちもこうした環境の中で不良化の傾向があって、教育のむつかしさに苦悩は尽きなかった」(松岡他1994:144,166)という回想がある一方、「生徒指導については、そんなに手をやかなかった」(金武中学校1999:205)ともいわれている。後者は、高度成長以前の伝統的な結束力の残る社会的背景のもと、人間形成環境が二重の構造をもって存在していたことをうかがわせる興味深い発言記録である。一方で地域社会には生活態度、労働、方言による言葉遣い、人間関係の作法など地域固有の人間形成作用が存在し、他方で金武中は実学重視の姿勢によってそれとの対立を慎重に避け併走的に近代的な知識技術の伝達をおこなっていた。このような二つの人間形成力学が

働く場であって、若者たちは学校の生徒の一員であることに間違いはないが、早くも立派な労働力を備えた村人の一員でもあったといえる。「机腰掛五十脚完成す、正規格の机腰掛で其の資材は生徒の手によって伐り出し製材も生徒の手によってなされ大工によって立派な机腰掛が完成された」(1954.2.15)、「子供といえども一家の生活の担い手であったし、学校においては毎年襲来する台風に潰された校舎の復旧作業に従事し、先生方と生徒がほんとうに汗みどろになって力を合わせて学校づくりに励んだ」(松岡他1994:188)。そのような学校づくりに向けての信頼関係のもと、反学校的な行動の可能性は縮減され、それなりの秩序が維持されていたようにみえる。今日では学校の「生徒指導」に属するようになってきた諸々の人間形成の力はすでに地域に伝統として備わっており、それがまた学校との折り合いのよさを保っていた。若者たちは早くから労働に親しみ、学校の施設整備に尽力しうる資質をもった、いわば地域の「一人前」(田嶋1990:33-34)にほど近い若い大人のような存在であった。

このような二重構造は、初期段階が人間形成における主導権の未確立状況にあり、潜在的には両者が対立し秩序を失う可能性ももちろんありうる。例えば共通語vs方言という対立構図はその非常に象徴的な局面である。ところが、金武中の場合をみると、初期の窮乏期は地域との葛藤は少なく、かえって良好な校風が生み出されていた点は重要である。「その当時は職員と管理職の仲は大変よく、また生徒と教師の間もすばらしく、卒業式には「仰げば尊し」の歌を唄い、皆すすり泣きした時代であった……〔初代校長の〕人柄が職員や生徒たちにやる気を起こさせ、学校全体が生気に満ち満ちた時代であった」(松岡他1994:149)。

6. 強い分類とその制御構造

なぜ金武中はこのような良好な学校の船出が実現しえたのだろうか。ここでは、初期段階における秩序形成の様子を「分類」(バーンステイン訳書1996=2011:47-50)という概念に基づいてモデル化し、解釈を進めたい。分類はあるものと他の分け隔てを強い・弱いという形で把握し、教育知

識や教育時空間、各種物理的事物、人間関係のあり方を類型的に分析する際に有効な概念である。初期段階金武中では、校長と教師、教師と生徒、地域－学校間には、それぞれ強い分類が確立され、バーンステインのいう収集コード型の学校類型をとっていた。例えば校長と一般教師の関係をみると、「[校長]の期待に応える仕事ができず、よくお叱言をいただき、こっぴどく叱られたこともあった。愛の鞭である。当時の教育界の風土として先輩、後輩の人間の結びつきがあって、後輩は先輩から学んで育ったものだ……[校長]は、事、教育にかかわる話になると、眼光が鋭くひかり、近寄り難いまでの表情に変わり私たちにぐいぐい迫ってくるのを感じた」(松岡他1994:144)。もちろん愛の鞭は教師－生徒間関係にもあり、この時代の「先生」はあまねく怖い存在だったことはよく知られた事実である。「当時はスパルタ式教育の名残なのかどうかはしりませんが、先生方の指導はかなり厳しく个性的であったように覚えています」(松岡他1994:188)。また、学校は、日常的使用言語との明白な違いからして地域社会から隔絶した世界を構成しており⁵⁾、共通語によって伝達される教育知識は生活言語との隔たりが大きく、やはりここでも分類は強いものとなる。金武中では、少なくとも1962年ごろまでは学校内で方言を使用した者への罰札である「方言札」が存在していた。共通語が浸透していなかった同時代において「その当時は共通語を使う習慣というのはまず全くないと言っていい」(仲嶺2015:94)ともいわれ、方言札は教室に静寂と緊張感を生み出す道具として君臨していた(先にみた教師・生徒らが地域の労役に参与したケースは強い分類の例外になるが、それは後述するように重要な意味があった)。

初期段階の分類の強い学校類型は、高度成長以前の経済構造を背景に、精神労働者層と肉体労働者層とが明白に二分された社会の構築とその再生産を想定し⁶⁾、両階層にそれぞれ対応した人材配分の機会を含ませつつ、なおかつ学校が社会進歩の担い手たろうとする志向性を保持し、その結果地域に対するヘゲモニーが掌握されていたようにみえる。窮乏からの脱却が地域の最重要課題だった初期段階にあって、二層化された社会が想定さ

れたことはきわめて時代適合的だった。およそ八割もの人びとが第一次産業に携わった同時代において、学校を介した職業選択の道はほぼ例外的なものだったであろうからである。加えて金武中の生産教育は単に日常的農業労働が学校に組み込まれたものではなく、近代的な機械を操ることによってよりも効率的な農業が可能になるという新しい労働形態の展望を示すものであり、その知識技術は同時代の学校での伝達にふさわしい進歩主義的な色彩を基調とする形に再文脈化された言説によって構成されていたとみられる(バーンステイン訳書1996=2011:84)。製材所・製材機に関する『学校沿革』の記述をみてみよう。

▲簡易製材機を取付ける、エンジン五馬力、某某両区より出費して購入、シャフト、プーリ等金武機械工場の奉仕により解決。取付台は某さん(大工)、エンジン取付は某氏某氏某氏等の労力奉仕による。総計費壺万円、両区の負擔による(1950.6.7)。

▲製材機用エンジン調節す、某氏某氏一日中労力奉仕で働いてくれました(1951.3.12)。

▲六馬力ヤンマーエンジン一台、時価約三万円、某氏寄贈。いよいよ本格的な製材製粉施設⁷⁾が出来本校生産教育施設に画期的な一異彩を呈した(1952.5.2)。

▲製材機取付台作製作業、某氏(製材所)の指導の下に本格的な台が作られた(1953.8.30)。

▲小学校中学校の放送設備に使途することに決す、目標額六万円でアンプ二ヶエンジン一基暗幕等の購入をすることにした(1956.7.10)。

金武中における製材機の導入はこのように地域からの多大な支援によって実現され、1950年度『学校沿革』末尾「本学年度実践行事」に「簡易製材機取付け」と特筆されるなど大きな期待感をもって迎えられた。例えば次の如くである。「製材機や発電機は生きた我々の教材になる等当時生きるための必要な事を実践して学びました[1952年度卒]」(金武中学校1999:82)「電気機械文明の到来を夢見て、ヤンマーエンジンを原動機に、小型の製粉機を設置し、直接生徒に操作させ米を製粉した」。その他、「勇壮なハリュー船(爬竜船:旧

暦5月4日に浜辺でボート競漕をおこなう沖縄の伝統行事}大会などにも生徒も先生も全員参加で応援し、学校は地域の行事などのイニシアチブをとっておられたようです」「早めに出勤なされた先生はトランペットを吹き鳴らし、児童生徒に早登校を奨励しておられたらしい。先生のラッパの音は児童生徒ばかりでなく多くの村民に一際新鮮な印象を与え、鼓舞したようである」(松岡他1994:155,189-190,191-192)という啓蒙的な学校の姿もみられた。こんな回想もある。

▲某〔校長〕は教員家庭、私の方は百姓家庭。いろんな面で生活の格差は歴然としていました。蓄音機を初めて見たのも某〔校長〕の家でした。竹林を通して美しい音声が聞こえてくる。人間の歌声ならまだしも、明らかに伴奏つき。なぜ、家の中からこんな音が流れてくるのだろうか、私とバアさんはキョトンとして、私たちの想像力の限界を超えるこの出来事に、ただボウ然。とにかく何かが起こっていると、バアさんと一緒に恐る恐る某の軒下まで忍びこんで見たものが、“歌う箱”の蓄音機というものでした(松岡他1994:75-76)。

類を見ない立派な製材所と機械、農業実習を伴う確かな知識技術、教師の持つ文化的・物質的先進性、それらのことを通じて科学技術の伝達を担う学校が社会の進歩をリードすることに貢献するのだ、という先導的役割を分類の強さを伴いながら確立し、さらにそれを地域にアピールすることに成功していたとも類推できる。とりわけ金武中の生産教育と「視聴覚の研究」(金武中学校1999:197)の成果は広く外部に披露され、沖縄県各地から参集した教育関係者たちから絶大な賞讃を浴びた。「一週間に場合によっては二回、三回と学校に視察者がいらっしゃるわけですね。これが全県なんです。遠くは離島からも」「あっちこちの学校からすばらしい研修会ということで参加をして見てこれたのを覚えていますね。すばらしい研究会ができたと思います」(金武中学校1999:196)。

▲学習施設研究会の発表をなす。文教部某課長某氏某氏某氏の各指導主事教育長某氏某教育会長を

始め……各地区より来校約二〇〇名余の先生方村の有志父兄多数来校されて一日の日程を愉快に送ることが出来た。よき結果を参観の方々の絶賛をあびて盛会裡に終了した。研究発表の力点は学習環境の物的環境の樹立に創立来大意になって進められて来たことを紹介した。戦争に打ちひしがれ無いづくしの現実からいろいろと生み出し学習の施設に努力を進められて来たその成果を賞して下さった。某氏から一阡円の寄付があった(1952.3.10)。▲実験学校研究発表会準備のために某氏(大工組会長)は宿直室設計や研究会当日の計画に盡力某氏はいろいろと電気方面配線等に力をかけて貰い地域社会の方々の力添えも亦本校の教育振興上に見のがしてならないものがある(1953.3.13)。

▲実験学校研究発表会開催す。文教局指導課某氏始各課から見え十三名、全島各地から校長教員約三〇〇名盲啞学校長や職員生徒もお見えになり某新聞記者放送局記者なども見え希に見る盛大な催しであった。私たちの研究テーマは「学習施設経営」と題して発表し、その実際を見て貰った。その成果は素ばらしいものと大なる好評を^(ママ)拍した。特に生徒会長某君の堂々たる発表は並居る先生方に大きな感激を与えた(1953.3.14)。

▲沖縄理科同好会主催研究会を本校に於て開催す。〔沖縄本島の〕北中南より会員百名余り参集……第一部1. ヤンマー機操作班、2. 投影顕微鏡操作班、3. テープレコーダー操作班、第二部1. 映写機操作班……文教局某主事某主事某会長某副会長外中南北部の理科主任約百余名……参集盛況裡に有意義な研究会が催された(1954.2.25)。

▲地区職家科研究集会本校に於て開催す。文教局某指導主事某指導主事某教育長列席の下に地区各校職家科担任教師三十五名参加して研究討議がなされ成果を挙げた(1954.11.22-23)。

分類の強い収集コード型の学校類型においては「学科内容は公共の議論や挑戦にさらされない」(バーンステイン訳書1996=2011:49)性質を持つため、初期段階金武中における研究発表の盛況よりは教育的権威(P. ブルデュー)の調達課題を十分にクリアしていた状況象徴するものだったとみなすこともできよう(反対に分類が弱い現在のような統合コード型モデルの学校類型は「非常

に傷つきやすい」とされる)。初期段階金武中の生産教育を基軸とした秩序は、学力競争とは異なる独自の方向性を持つものとして広くその意義が認められていったのである。

他方、バーンステインは「分類はつねに権力関係を運ぶ」とも述べている（バーンステイン訳書1996=2011：43）。そのため、分類の強い知識や人間関係の局面が継続することは力関係を明白化し、堅苦しい窮屈な時空間をたえず生み出すものであることから、それをうまく制御する関係調節のための諸局面も必要となってくる。その制御の一例として、「万能校長」（松岡他1994：176）の名にふさわしい、地元金武出身で初代校長（1948-57在籍）の、実に珍しいほどの多才・多芸で知られた个性的な人柄があげられる（戦後ある時期まではこのような「大校長」が各地に多く存在していたものだろう）。以下長くなるが、彼の米寿を祝って出版された松岡他（1994）からその片鱗を紹介しよう。

<優れた教育者・リーダーシップ>

▲当時の仲間の先生や地域の人々が異口同音、スポーツ堪能、音楽拔群、国語教育技術の先端ともいえる ^(ママ) 葦田式教育法推進の一人者として、教育に対する情熱は並々ならぬものがあった（p.128）／「職員会が沈滞ムードの中」某先生独特の泰然となされた表情で、「よし、〔研究発表会を〕やる事にしよう。すべては私が責任をもつ。皆さん、己についてきなさい」との力のこもった一言。議題は万事決着……今以てその時の感動は、全身に高貴な思い出として深く刻みこまれている（pp.170-171）

<職員懇親会の盛り上げ役>

▲〔忘年会で〕三味線を前にかかえたり、肩に載せたり、両手も三味線も背後にまわしたりして、テンポの早い民謡曲を弾きながら美しい声で歌いまくるのであった。玄人はだしの見事な演奏、その時のことをいつまでも忘れられない（p.84）／余興が始まると、某先生の出し物は、三味線を抱えての即興歌であった。程よく酒気を帯びて歌をうたい、三味線を爪弾く時のあの笑顔は、男さえ惚れ惚れするものだった（p.122）／先生の得意な演技は、三味線を持って「ヒヤミカチ節」

を歌うことである……目を細め、満面に微笑を浮かべ、ひょっとこのように口をとんがらして歌い出す。この歌が始まるともう最高潮である（p.176）

<音楽とスポーツの才覚の持ち主>

▲オルガンは勿論、三味線やトランペットの吹奏なども格別堪能であった（p.84）／金武校の在職中、体育・スポーツの面での生徒への訓化はもとより、広く地域スポーツの指導啓発にも大きな功績を残された（p.99）／音楽を愛され、毎年行われた運動会の音楽堂で得意の吹奏楽を演奏されて多くの村人から親しまれ〔た〕（p.160）

<気さくで話術に長けた人柄>

▲某先生は極めて和やかな御性格で、総じて自ら言挙げすることなく、和顔愛語、誰からも親しまれたものと思う。多くの教え子達から慕われるのも、たくまざる中に人間的魅力があるからであろう（p.85）／先生が講談調、能楽的で抑揚のある喉をしぼるような声で院庄を歌われ最高に盛り上げる……見る人をして感涙させる名演出家でもあった（p.118）／先生のお話は正に天声人語的だったと思います（p.160）／公私、直接間接、老若男女、昼夜沢山の金武の人びととつきあわれましたが、その数では後にも先にも先生の右にでるものは居ないでしょう（pp.160-161）

<高度な技術者>

▲先生は、手先きが器用の方で大工以上の技量を持っておられた。職員を叱咤激励され教材、教具の開発に取り組まれた。先生と職員によって製作されたものは、掛図、鉄棒、跳箱、理科実験器具、備品棚、書類棚、学級文庫等であるが、無い無い尽しのあの頃にあれだけの教材、教具が整えられたのも先生の教育に対する熱意と誠意の賜である（p.146）／先生は毎日のように作業服姿で大工になりきり、汗を流して本棚や教卓等を製作をしておられた。特に某教頭先生とのコンビで楽しそうに鉤・鋸・金つちを使つての見事な手さばきは、いまでも鮮明に脳裏に焼きついている（p.155）

教師はまぎれもなく学校的なエリートであり、知的な存在として庶民とは異なる社会階層に属する。多くの場合、教師志望者は若い段階で学術的世界とその伝達技術を学ぶ過程に身を置くことで次第に地域固有の文化的世界と距離をおかざるを

得ない境遇を過ごす。新しい世代の担い手である子ども・若者を成長させ、社会進歩の役割を担うためにも地域とある程度の距離をとることは不可避のことだろう。しかしひとたび教壇に立ち、教育の仕事に携わる段では何らかの形で地域への回帰を果たす課題に直面することになる。戦前からの伝統をもたないためその存在意義が不確かで、なおかつ分類の強い学校類型にシフトをとった初期段階金武中の場合、その代わり一層地域への理解と融和がなされる局面の数々を学校内外に生み出していくことが並行して要請される。初代校長は、新規の音楽・スポーツ文化普及のみならず、幅広い社交家、大工の達人、玄人の伝統芸能家さながらに、高い労働能力や地域固有の言語・文化に造詣の深い両刀使いの人物を演出することで役割距離の効果（E. ゴッフマン訳書1961=1985：141、それは「高い役職者の特権」ともいわれる）を存分に発揮し、全人格をもってその要請に応えようとしていたように見えるのである。そしてその人格は、彼個人の技量のみで説明されるべきものではなく、地域が学校指導者に求めたある独特の理想的な関係構築の像を体現したものだった、と解釈したい。

7. 秩序紊乱の危機——結びにかえて

本稿では、金武中『学校沿革』他を素材に初期段階に特有の秩序形成の様子をうかがってきた。高度成長のもとで地域社会の劇的な変貌を迎える以前、競争秩序の未確立段階のもとで出発した金武中では、生産教育を基軸とした運営がなされ、地域－学校間で共有された競争の抑制と協調的關係性のもとに独自の秩序形成が図られていた実態が明らかとなった。学力競争が生徒たちの個人的かつ能動的な参画によって自己展開されるものであるのに対し、初期段階金武中では、強い分類を特徴とする収集コード型の学校類型の確立とその制御がはかられ、学校側が積極的に地域社会の労働世界の価値観を吸収しつつ、社会進歩の役割をも担う形で生徒たちを強く牽引するという特徴を持つものだった。

その取り組みは、金武中を視察した金子孫市氏によって「コワカリキュラム」の学校として大々

的に宣伝され、「あっちこっちの先生方」の来訪を受けるようになった（金武中学校1999：196）。梅根悟氏もまた金武中を訪問しており、『学校沿革』では「本校の^(ママ)中学校教育の正しい運営の歩みを続けてゐる。特に職家科学習施設とねらいは非常によいとの講評をなし、本校〔を〕視察された事項を中心に講演をなされた。本校教育運営に光明をもたらした有意義の機会であった」（1953.7.15）とも記されている。初期段階金武中の生産教育はこのように一部の戦後教育学者たちをうならせ、手放しにその意義が讃えられることになった。ただ、金武中教師たちはコア・カリキュラムを「全然わからない」（金武中学校1999：196）状況の中でかれらなりの生産教育を展開しており、そのような学術的意味づけとは異なるところの、同時代に特有の秩序課題解決の一つの自生的な姿を示す取り組みであったようにみえる。

また、それは初期段階という特定の社会的状況の中で生み出された秩序であったことは注意すべきである。新制中学に内包された秩序紊乱の危機は、特に1980年代以後において露呈してくる。1980年代は日本のあらゆる学校で受験競争と厳しすぎる管理主義が席卷し、そして「ツツパリ文化」に象徴されるように、多くの生徒たちが荒れた時代でもあった。この時期の学校はもはや社会進歩をリードすることよりも、面前の生徒たちをいかに統制し秩序を保持するかに注力するようになった。当然、かつての分類の強さは後退し、統合コード型の学校類型のもと、教師－生徒関係も著しく変化した。これは、産業化以後の社会において「学校の価値体系の明瞭さと、社会の価値体系の曖昧さの間の鋭い亀裂」（バーンステイン訳書1978=1985：71）が生じてくると連動している。

とくに際だった秩序動揺の例として校則改正（男子生徒の丸刈り強制反対や女子生徒の体育着の形を変えてもらいたい、など）を求めてしばしば大規模な授業ボイコットがみられた点があげられる。「授業ボイコット事件（約二時間）慎重に且つ厳しく対処す」（1980.10.15）。「校則を変えてもらうために、授業を放棄して、ほとんどの同学年の生徒が体育館に座り込みをした……公的な場で、生徒達が先生方に反抗してみせるには、本当に勇気のいることだった……校則を変える運動をした

ということは、大変有意義であったと、今にして思う」(金武中学校1999:147、1980年代卒業生)。対比的に時代の相異を感じさせる古いエピソードを紹介しよう。「極めつけは後々まで伝説として残った「前ヌ浜決闘」だ。ほとんどの男子生徒がかかわった「いじめ」に端を発した前ヌ浜で八十人余の集団乱闘だ。いじめ側に果たし状を叩きつけた。首謀となりルール決めと人集めは某と優等生の某であった」(金武中学校1999:118、1960年代卒業生)。ここには、学校・教師の関与が及ばないところで大規模な闘争の組織化とルールの明確化がなされ、人間関係の葛藤や暴力の問題を自らの手で処理し解決しようとする自立心旺盛な若者たちの姿がある。1980年代に至り、そのような問題は学校の内部であふれ出すようになったという見方もできる。ただ、1980年代の生徒の反抗や荒れは、反学校的な気質の強いものだったとはいえ、授業ボイコットにみられるように学校の厳しい管理主義に対抗し対話による解決を目指そうとする大人びた姿勢が含まれ、また生徒どうしの集団的結束力もなお強いという特徴があった。これらの点は1990年代以降の生徒たちとは異なる様相を帯びていたものと振り返ることができよう。

本稿では、初期段階を中心とした金武中の秩序に注目してきたが、上記のような1980年代の荒れ、それに続く1990年代以後の「新しい荒れ」の中、金武中の秩序形成がいかにして図られていったのか、という点の考察は今後の課題とする。

註

- 1) 文字数をカウントする際に教員異動や生徒数その他の統計的データは除外し、日々の記事として記された文字のみを対象とした(句読点や括弧も文字数に加えた)。年度により1日あたりの平均執筆量に差があるかどうかを一元配置分散分析によって調べた。Welchの修正分散分析により、0.1%水準で有意差がみられ($F(3,683.27)=22.59, p<.001, \eta^2=0.03$)、年度ごとの平均執筆量に差があることがわかった。Leveneの等分散性の検定において分散が等しくなかったため、Games-Howellによる多重比較を試みたところ、②1960<①1950***③1970*④1980***、③1970<④1980**という結果を得た。*は $p<.05$ 、**は $p<.01$ 、***は $p<.001$ を示す。
- 2) この教科は各地域・学校の実情により多様な取り組

まれ方がなされていた。大西公恵による長野県飯田東中の研究(2016:95)によれば、農業を希望する生徒が少なかったためそれを設置しておらず、また進学希望者が多かった事情から1953年度で英語を選択した3年生生徒の割合は68.7%にのぼる。

- 3) ところで、金武町における米軍海兵隊基地キャンプ・ハンセンは、その前身が既に終戦直前の時期から存在し、その規模は町面積の約60%を占めるに至る。米軍は金武における長年の「隣人」であり続けているところであるが、今日もなお「騒音公害や環境破壊、軍人軍属による事件事故等がたびたび発生」するなどの問題を抱えている(<http://www.town.kin.okinawa.jp/chosei/84>、2019年7月7日閲覧)。『学校沿革』にはたびたび米軍に関する記事が掲載されている。いくつか記事を拾うと、「米軍演習の爆風によって校舎の窓硝子二三枚破損」(1958.5.24)などの問題のほか、「赤十字デー米軍慰問として花束」(1950.5.8)「米軍人を招待して学藝会を催す」(1950.5.26)「軍部隊ハンセンより運動用具の寄贈」(1958.5.19)「新敷地地均」(1960.4.11ほか)「米軍第三海兵隊の音楽演奏が金武小学校で行われた」(1960.5.27)などの交流記事もみられた。1970年度の校地拡張地均し以降は米軍に関連した記事が消長する。
- 4) ただ、本田(2005:155-157)によって示された国際比較調査(1998年総務庁)の結果によれば、学校に「職業的技能の取得」の意義を感じた日本の若者たちの割合は後期中等教育段階で12.9%、中等後教育段階で30.1%、調査対象11カ国中どれも最下位となっていて、「教育の「意義」に対する日本の若者たちの認識の仕方が、このように国際的に見ても相当に特異である」と明らかにしている。中学校よりも上の学校段階においてもなお日本における教育の職業的意義の模索が課題として残り続けている。
- 5) 共通語と琉球方言の大きな相違と意思疎通の難しさが著しいものであったことは多くの者が述べるところである。言語学者服部四郎の研究によれば、「京都方言と首里方言とは、今から約1450年乃至1700余年前に分離」したものと推定され、その語彙的な残存率を比較すると、首里方言と京都方言は64.80%、首里方言と東京方言は65.19%とされており、「現代英語と現代ドイツ語との共通残存語は58.5%」ともされることから(服部1954=1960:553-560)、このデータに依拠し「本土方言と琉球方言の差は、英語とドイツ語との差にほぼ近い」という解釈もなされている(本永1983:1)。
- 6) バーンステインはこの点について分類の強い中世の大学と分類の弱い現代の大学とを対比し、前者が「精神労働と肉体労働との間の強い疎隔が伴っていた」、そこに「肉体労働が統合されることはなかった」と

いう形で分離していたと指摘している（バーンステイン訳書1996=2011：44-45）。初期段階金武中の生産教育はその過渡的な形態であるようにみえる。

- 7) 製粉機も地域の方の寄贈によるもので、「盆の時の供えものを当時はほとんどが家庭で全部作っている時代で、それを〔金武中に〕持ってきたものだから夜遅くまでこの製粉機を動かしましてね」（金武中学校1999：208）などと地域の人々が活用する場面もみられた。「製粉機を一般区民に開放して盆用の製粉をして見た。注文^{（ママ）}雑倒して生産部の生徒は夜間まで作業をなす」（1952.9.3）。

参考文献

- バーンステイン、B（1978=1985）〔萩原元昭編訳〕『教育伝達の社会学——開かれた学校とは』明治図書。
- （1996=2011）〔久富善之・長谷川裕・山崎鎮親・小玉重夫・小澤浩明訳〕『〈教育〉の社会学理論——象徴統制、〈教育〉の言説、アイデンティティ』法政大学出版会（新装版）。
- ブルデュー、P（1970=1991）〔宮島喬訳〕『再生産——教育・社会・文化』藤原書店。
- ゴッフマン、E（1961=1985）〔佐藤毅・折橋徹彦訳〕『出会い』誠信書房。
- 服部四郎（1954=1960）『「言語年代学」即ち「語彙統計学」の方法について——日本祖語の年代』『言語学の方法』岩波書店。
- 早坂淳（2006）『学校秩序の新しい視角』筑波大学教育方法研究会『教育方法学研究』15号。
- 本田由紀（2005）『若者と仕事——「学校経由の就職」を超えて』東京大学出版会。
- 木村元（2015）『学校の戦後史』岩波新書。
- 金武町企画開発課（1991）『金武町と基地』金武町。
- 金武町誌編集委員会（1983）『金武町誌』金武町。
- 金武中学校（1999）『創立五十周年記念誌』私家本。
- 岸政彦（2013）『同化と他者化——戦後沖縄の本土就職者たち』ナカニシヤ出版。
- 小林千枝子（2015）『新制中学校における共同体的慣行と近代的価値——栃木県下都賀郡生井村立生井中学校の成立と展開』『作大論集』5号、作新学院大学。
- 久富善之（1993）『競争の教育——なぜ受験競争はかくも激化するのか』労働旬報社。
- （1996）『学校文化の構造と特質——「文化的な場」としての学校を考える』堀尾輝久・久富善之編（講座学校6）『学校文化という磁場』柏書房。
- 松岡政幸他（1994）『宮里武栄先生を語る』私家本。
- 本永守靖（1983）『琉球方言の特色』『沖縄における言語生活および言語能力に関する比較・測定的研究』科研費報告書（研究代表者：東江平之、課題番号531015）
- 仲嶺政光（2015）『沖縄における方言札の効果——沖縄県国頭郡金武町N地区を対象としたケーススタディー』日本生活指導学会『生活指導研究』No.32（<http://hdl.handle.net/10110/00018348>）。
- （2018）『「学校日誌」を読む——学校文化の社会史研究に向けて』『富山大学地域連携推進機構生涯学習部門年報』第20巻（<http://doi.org/10.15099/00019174>）。
- 中内敏夫（1992）『六・三制の誕生——「生い」と「教育」の社会史』叢書産む・育てる・教える——匿名の教育史第3巻宮田登・中村圭子他『老いと「生い」——隔離と再生』藤原書店。
- 大西公恵（2016）『1950年代初期における職業・家庭科のカリキュラム編成——長野県飯田市立飯田東中学校の事例を通して』『〈教育と社会〉研究』26号。
- 琉球政府行政主席統計局（1952=1998）『1950年国勢調査報告』〔復刻版〕（https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200521&tstat=000001036869&cycle=0&tclass1=000001038722&stat_infid=000008283285&second2=1、2019年7月7日閲覧）
- 菅井鳳展（2005）『新制中学校の発足とその整備への歩み』小山静子・菅井鳳展・山口和宏編『戦後公教育の成立——京都における中等教育』世織書房。
- 田嶋一（1990）『報告2 共同体の解体と〈青年〉の出現』叢書産む・育てる・教える——匿名の教育史第1巻編集委員会『〈教育〉——誕生と終焉』藤原書店。

謝辞

本研究を進めるにあたり金武中学校関係者の皆さま、教育行政関係者の皆さまには貴重な資料の閲覧をお許しいただき、多大な便宜をはかっていただいた。また、調査を進める中で地域の方から貴重な資料のご恵与、ご教示をいただいた。ここに厚く御礼を申し上げたい。